

- 1 派遣期日 令和5年11月7日（火）
- 2 派遣先 学校名：福島県いわき市立内郷第一中学校
所在地：福島県いわき市内郷高坂町立野 129-1
<https://iwaki.fcs.ed.jp/%E5%86%85%E9%83%B7%E7%AC%AC%E4%B8%80%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1>
- 3 研修内容 自己研修テーマ【情報教育の充実のために】

（1）公開授業参観及び研究協議

- ① 1 学年 2 組 総合的な学習の時間 「SDGs について学ぼう」（ゴミの分別）
- ・学習課題の設定のための GoogleForms を用いたアンケート結果の提示、電子黒板の活用
 - ・代表生徒による MicrosoftPowerPoint を用いたスライド発表
 - ・ゴミ分別のシミュレーションをグループ 1 台のタブレット P C で実施
 - ・電子黒板のタイマー利用による活動時間の設定
- 生徒の活動時間がしっかり確保されていた。説明や流れの確認の時間を短縮するための教師による I C T 利用、操作に慣れた生徒たちのスムーズな作業の様子が見られた。また、あえてグループで 1 台のタブレット P C にすることで、生徒同士の話し合いを活発にさせたいという授業者のねらいが明らかであった。身に付けさせたい資質や能力を中心とし、I C T を 1 つのツールとして効果的に活用している素晴らしい実践だと感じた。
- ② 2 学年 1 組 道徳の時間 「たすきとポンポン」
- ・ジェンダー問題に対する課題設定のためのテキストマイニングの利用
 - ・自分の考えを色で示したものを I C T で共有、色の濃さで気持ちの強さも表現
 - ・グループで話し合った内容をオクリンク（共有ソフト）で全体共有
 - ・残しておきたい板書は黒板に提示、流してもよいものは I C T で表示
- テキストマイニング（多く使用されているキーワードの抽出や全体の傾向を文字の大きさと表現するソフト）を利用することで、クラス全体の意見や考えが視覚的に分かりやすく提示されていた。色で自分の考えを表示し共有することで、気持ちの移り変わりや全体の傾向についてすぐに分かるようになっていた。全体の前で意見を述べることに抵抗のある生徒にとっても、授業に参加しやすい工夫がなされていると感じた。
- ③ 3 学年 3 組 英語 「A Legacy for Peace」
- ・I C T を使った、本時の課題に対するグッドモデルの提示
 - ・ムーブノートを用いた英文クイズの作成
 - ・作成したクイズを I C T で共有、コメント機能や拍手機能で互いに評価
 - ・A L T との役割分担
- 各生徒のペースに合わせてクイズの作成を行い、全体で共有し互いに評価し合うといった、個に応じた指導と協働的な学びの両方が見られた授業だった。クイズの作成を P C 上で行うことで加除訂正が容易で、生徒の積極的な取組につながっていた。また、コメント機能や拍手機能により生徒同士の学び合いが可視化されるとともに、自分のクイズをもう一度見直すことでより良いものへブラッシュアップできるようになっていた。

④ 3 学年 4 組 理科 「物体の運動」

- ・前時の実験を V T R で確認
- ・テキストマイニングで実験の条件制御を確認
- ・実験結果を Excel に入力、グラフを全体で共有
- ・実験の結果やまとめ、考えたことをムーブノートで共有

→前時の実験の様子を V T R で確認することで、本時の活動にスムーズに移れていた。グループで協力してデータを入力しグラフ化することで、多くの結果が共有できていた。電子黒板に比較したいいくつかのグラフを表示することでグッドモデルとバッドモデルを示し、正しい知識や技能を明確にするとともに生徒の学びを価値づけていた。タブレット P C の自由な使用を認めることで、実験方法を確認したり言葉の意味を検索したりするといった、場面に合った活用が見られた。

(2) 全体会及び講師指導(福島大学人間発達文化学類 准教授 坂本篤史先生)

- ・コンピュータの技量がないと個人の個性や能力が発揮できない時代を子どもたちは生きていく
- ・「I C T を教師がどう使うか」という考え方から「子どもがどう利用するか」という考えに転換する
- ・I C T 利用を目標とするのではなく、あくまでも自分が学ぶための 1 つのツールと捉える
- ・教師が子どもと一緒にチャレンジしていく気持ちをもつ

(3) I C T 体験コーナー

- ・実際に使用しているソフトについての説明
- ・これまで実践してきた内容の振り返り、説明
- ・情報主任によるタブレット P C 使用についてのアドバイス

4 感想

I C T の効果的な活用と主体的・対話的で深い学びを研究対象として 3 年目の実践ということで、公開された全ての授業で本時のねらいに沿った I C T の活用や、ペア・グループで学び合う活動が見られた。I C T を使うことだけを目標とせず、本時で身に付けたい資質や能力の獲得のためのツールとして捉えることで、I C T を使用する場面とワークシートやノートを使用する場面を区別していたのが印象的であった。また、授業の中で使用していたソフトは市の教育委員会等で準備されたものが多かったが、学校内での研修を重ねながら使用したいソフトを厳選していき、学校独自で整備しているものもあったことから、情報主任を中心として熱意をもって I C T 教育に力を入れているのが感じられた。生徒たちもタブレット P C に慣れている様子で、操作に困る生徒に対し周りの友人らが一緒になって解決しながら授業に臨む様子が見られた。普段から学習道具の 1 つとして I C T を利用しているからこそその取組であったと感じた。

今回の視察を通じて、I C T に対する教員の意識向上と生徒の活用技能の向上が大切であると改めて考えさせられた。生徒が身に付けるべき資質や能力の獲得のためのツールの 1 つとして I C T を利用する意識をもつこと、実際に利用できる技量を日頃の実践や研修により高めることが、本校や日立市にとって必要であることを実感した。よって、校内では主幹教諭として、主に若手の先生の手本となる実践を行いながら、これからの社会を生きていく子どもたちのために I C T の活用を今まで以上に進めていきたい。日立市に対しては、情報教育の指導員として、各学校の実践を結び付けたり、今回のような研修で得た知識や理論を伝達したりしていきたい。